

ほのぼの

第67号

令和6年

7月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209

ガンジス川



「しているはさしてもらっている」と

前住職

足場がないと立てません。今ここに立っているのは自分の力で立っているように思いますが、立たせてもらっているのです。足元に足場がなければ立てません。今この世に生まれていることと、寿命が尽きたら必ずこの世を去らねばならぬことは全てのいのちに共通しています。しかし人間と他の動物との差の一つは、寿命のある間にもらった「いのち」をどう使うかを、わが身に問うて生きるところにあるように思います。私たちは死ぬまで自分を中心にして生きます。何事も自分の思うようにしたいものですから、欲も尽きることはありませんし、思うようにならないとイライラして怒ってしまう。意識の上に現れていなくても、自分の得になることや、楽になることばかりを追いかけて振り回されている毎日です。そこには自分がこの世を去ることも、みんなと別れる日が来ることも眼中にはありません。わが身の現実を忘れて欲を通そうとす

るお恥ずかしい日々ばかりの者を凡夫といひます。

どこまでも自分中心ですから、何をしてても「私がした」の心が先に出てその成果を求めます。また他人に何か善いことをした場合も「〇〇〇してあげた、してやった」と思う。やっかいなことに、「してあげた」という思いはいつまでも心に残っています。相手の反応次第では「してやるのではなかった」と虚しくなることもあります。そうなると努力も、せっかく良いことをしたことも自分の喜びにつながらない。その結果は「して損をした、してあげるのではなかった」となる。これは残念なことです。

自分の人生において最も重要なことは「人間に生まれてよかった。有難う」とうなずける今を生きているかどうかのように思います。このことを如来さまは教えてくださいます。「した」とか「してあげる」は自分を中心に世界が動いていると考えているからです。「この世は自分の都合のよいように動いてはいない」と如来さまはおおせられます。

有る人が言いました。「私が辛抱しているから、家の内はうまくいっている」と。

これを聞いてお念仏を喜んでいる一人の信者が言

われた。「みんなが辛抱してくれているから、うちの家はうまくいっている」と。

どちらの人が「ありがとう」と自分の人生を受けいられているでしょうか。「する」でなく「さしてもらつ」の道は如来さまのおおせです。

九十歳になられた女優の草笛光子さんはインタビューで言われています。「九十歳はまだまだ新しいことに挑戦できる年です。これから新しい出会いがあった時にいつでも飛び込めるように準備しておかないか、と思います」と。

「家族にも、お客様にも、一緒にお仕事をしてきた方々にも、今までたくさん（ギフト）（支えてもらったこと）をいただけてきました。だから今の私がある。そしてみなさまにいつでも何か差し上げられる自分でありたい。一生勉強だなと思っています」と。

「散る時が 浮かぶ時なり 蓮の花」という有名な句があります。「散る時」とは死ぬ時です。「浮かぶ時」とはお浄土の蓮の花に生まれる時のことです。

南無阿弥陀仏



花まつり

令和六年四月四日（木）いたやど保育園の年中さん、年長さん合わせて三十五人と門信徒さんのお子さんがお参りしました。花御堂に甘茶をかけて、いただき、その由来を聞きました。そして、本堂で大学生から仏教童話「共命鳥」について読み聞かせしてもらいました。大スクリーンに投影した絵本を見た後、



内容についてのクイズをみんなで考えました。あらゆる縁によって世界はできている。お互いを大切にすることの素晴らしさを仏教的にお話でき

たと思います。折り紙のプレゼントやお菓子なども用意し、また大人も子どもも楽しめるように色紙に仏画を写して彩色をしました。世界に一つだけの仏さまを描いて記念に持ち帰りして頂きました。とても楽しくお釈迦様のご生誕をお祝いすることができました。



信行寺門信徒会総会

四月二十二日（土）に門信徒会総会が行われました。昨年度の活動報告及び会計報告、今年度の活動計画案と予算案の報告が行われ、承認されました。今年度の予算には、信行寺維持費より信行寺の外壁塗装工事費への寄付五十万円が承認されました。信行寺が建立されて初めての外壁塗装となります。五月末には工事も終了しきれいに明るくなりました。是非お参りください。今年度も皆様のご参加、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

また今年も、総会の出席記念品として、役員の多田清子様より手作りの焼き物をいただきました。ありがとうございます。

ぜひ、来年度の総会もご出席下さい。



ご縁とは

遠藤 泰子

幼い頃に主人は、祖母に連れられて法話を聞きにお寺へよく行っていたそうです。むろん、主人の記憶にほとんど残っていないようですが。

祖母は、主人の実家へ行くといつもよく働いていました。明るくおしゃべりしたり、巻き寿司の作り方や魚のさばき方などを新米主婦の私にとっても優しく教えてくれたりしました。年齢はとても離れているのにそんなことを感じさせないほど話題も豊富な方でした。私の子育てや介護に忙しくなり、祖母も歳を重ね、会うことも少なくなりましたがお便りは欠かしませんでした。

時は流れ、お世話になった方々や両親もお浄土へ旅立ち、私も時間に余裕ができるようになりました。気がつけば、自然と祖母が通い慣れたお寺、信行寺に足が向くようになっていました。ヨガ、写経、法話会、研修旅行と数々の行事に参加させていただき、

阿弥陀様を通しての繋がり、新たな交流が生まれました。

そんななかでさらに仏教観を学び、日常とは異なる時間から精神的な安らぎを感じ、自然とお仏壇に向かい『なもあみだぶつ』がこぼれてきます。

今までの人生、いろいろな出来事がありました。それでも有り難いことに、こうなればいいなあと思っていたことが実現してきているよう思います。

これからも前向きにひたすら、阿弥陀様を思い、お浄土に旅立たれた近しい方々を偲び、いつか私もお浄土へ参ったならば信仰の志を与えてくださった祖母に報告したいと思っております。

下の写真は、私が信行寺の写経で書いた用紙をパネルに貼り付けたものです。

写経は毎月第二月曜日です。皆さんも一緒に参加しませんか。



「これはなにごとぞ」

住職

親鸞聖人の伴侶、恵信尼さまのお手紙（恵信尼消息）には親鸞聖人の御往生の際に末娘の覚信尼さまに宛てた回想録のようなエピソードがあります。親鸞聖人五十九歳の時に高熱と頭痛で寝込まれて四日目の明け方に寝言を言われるので、恵信尼さまがどうされたのですかと尋ねると、寝込んで二日目から無量寿経をずっと読み続けていたとおっしゃいます。目を閉じれば經典の文字が光輝いてはつきり見える。思い起こせば十八年程前に越後から関東に向かう途中で飢饉に苦しむ農村の人たちの要望に応じて浄土三部経を千回読もうとされたことがありました。比叡山など当時の仏教では祈祷のために經典を読誦するということは一般的なことでした。苦しむ人々の為にと思い読み始めたのですが、四、五日してから「これはなにごとぞ」これは一体何をしているのか、と気づかれたそうです。

南無阿弥陀仏のお念仏の他に何の不足があつて經典を千回も読もうとしたのか。阿弥陀様の他力の

前では自分の努力や計らいは不要であることを理解しているつもりであつても、まだ自力の心が残っていたのか。人間の執着の心、自力の心はよくよく考えて気を付けていなければならないと思い直し、読むのをやめられたのでした。

自力という人間のはからいを一切まじえず、ただただ念仏して阿弥陀様に救われていくのが親鸞聖人の歩まれた他力念仏の道。しかしながら、その親鸞聖人であつても拭い去るのが難しいほどに自力根性を持っているのが私たち人間であります。

一般的な人間感情からすれば、困っている人に対して何か手助けをしてあげるのは親切な行為でありますし、飢饉など人間の努力ではどうしようもない苦しみに対して、僧侶として何かできることはないかと思われて經典読誦ということをするのは、もっともなことのように思います。

しかし、よく考えますと因果の道理に合わせ人間の慢心ともいえる行為であり、親鸞聖人の他力念仏に対する宗教的純粋性がよく伝わるエピソードだと思います。

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、七月の法語の説明をします。深川倫雄さんの言葉です。



行いと言葉の
背後に
世間があるか
如来があるか

みなさんも日々の行いや言ってしまったことを後からあんなことしなければよかった、あんな言い方しなければよかったと後悔したことがあるのではないのでしょうか。

人間は愚痴を言ったり、腹を立てたりします。感情が高ぶり、声を荒げてしまいます。仏教では根本的な煩惱として三毒（愚痴、怒り、貪欲）があります。三毒は私達の煩惱で容易に取り除くことができ

ません。その煩惱から生じた苦しみに人間はまた悩み、思索と反省を繰り返します。また、煩惱から苦しみが生じていることに気づかない人にとっては、他者によって苦しみが生じているものと思ひ込み原因をすり替えてしまいます。

世間とは、自分中心の考え方であり、不安定な迷いの世界の現象ともいえます。

一方、如来さま（仏さま）の考えは真実の世界であり、世間を超えた視点です。それを理解することが困難である私達です。しかし、日々の言動を省みる機会をいただく時に、阿弥陀如来に出遇えた喜びの中から出てきたことなのか、煩惱からうまれたことなのかを自身に問い改めることが大切なのではないのでしょうか。仏さまの真実の見抜かれた世界に触れることで私達は安らかな心を得ることが出来ます。

例えば、つまずいた時に「腹を立てるだけの人」とそれを縁にして「さとる人」がいます。世間の考えを中心に生きるか、如来の見られた世界を生きるか、どちらにしますか？

日頃の疑問を考えよう

Q お寺の名前の前に〇〇山とついていますが、どんな意味があるのですか？

A それは、「山号」といいます。「山号」はお寺の名前（寺号）の上に冠する称号です。もとは平安時代に伝教大師が比叡山に天台宗を開かれ延暦寺を建立、また、弘法大師は高野山に真言宗を開かれて金剛峰寺を建立されました。

その後、同じようにお寺の多くは山上に建てられるようになったので「山号」をつけるようになりました。寺名より山名の方が一般人に知られているからでしょう。鎌倉時代以降は、禅宗の影響を受けて山中でなく平地に建立されたお寺でも「山号」を付ける風習が広まりました。お寺の所在する山名でなく、所在地の名称、由緒による名称、あるいはお経の言葉から選んで「山号」にしました。

山号を付けていないお寺もあります。東本願寺（大谷派）には、山号がありません。

西本願寺は、龍谷山本願寺という山号があります。この「龍谷」の起源は、本願寺の発祥の地（お堂・

お墓）がオオタニという地名を表している文字なのです。すでに、今は使わない漢字なのですが、左側に「谷」と書いてヘンとします。そして右側のツクリに「龍」と書いてひとつの文字とします。つまり「谷と龍」と横に並べて書いて、ひとつの文字だったわけです。その一文字を「オオタニ」と昔は呼んでいて、地名だったのです。本来であれば、谷龍（コクリュウ）ですが、並びを変えたのでしょうか。

Q 信行寺には、山号があるのですか？

A 信行寺の「山号」は「護法山」といいます。これはお釈迦様の説かれました「大無量寿經」のことばです。菩薩さまが決意を述べられて「嚴護法城 開闡法門」（念仏を伝える法の城を護りぬき、仏法の教えを広める）と仰せられます。本堂の正面入口の上に「護法城」の扁額が掲げてあります。「山」ではなくあえて「城」のままにして、信行寺の役目がここにあることを表しています。



信行寺行事予定とご案内



◇本堂納骨お盆法要

八月十六日（金）午後二時～

◇夏期特別法座

八月十八日（日）十一時～十五時

信行寺本堂・礼拝堂にて、昼食をはさんで行います。ご希望の方はお寺に問い合わせの上、申し込み下さい。

◇秋の彼岸法要

九月二十八日（土）午後二時～住職

二十九日（日）午後二時～前住職

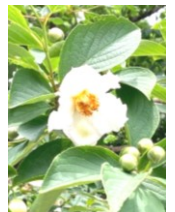
◇西大谷納骨参拝

十月二十日（日）

納骨・参拝を希望される方は、バスで一緒にいたしますので、早めにお寺に問い合わせ、申し込み下さい。

編集委員より

「語り継ぐコトノハ ほのぼの RADIO」



前住職のお話の放送がはじまりました。（スマートフォン等から聞けます）第一回は前住職の生い立ちから始まりです。在家で生を受けられた前住職を、ご両親は最初からお坊さんにしようと強い思いで育てられたそうです。やがて京都の龍谷大学へと出立する冬の夜、荷造りした行李（こうり）を手押し車にのせて、お母様と一緒にバス停へと向かわれたそうです。そこで最終バスを待つ間の寒くて長い時を過ごすおふたりの会話、心情、そしてバスが発してからも見えなくなるまで見送られていたお母様のすがたや思いに、親の慈悲、如来の慈悲を具体的に知らしてもらった、とお話されています。静かではのぼのとした気持ちで聞かせていただきました。令和六年四月一日より毎週月曜日の朝七時から配信されています。聞き逃しても何時でも何回でも繰り返し聞くことが出来ます。皆さんとご一緒に貴重なお話を聞かせていただきますように。

多田 清子

（グーグルなどで「語り継ぐコトノハ」と検索ください。詳しく知りたい方はお寺に問い合わせ下さい。）